

Ernest Hemingway: Fathers and Sons

——短篇小説の技巧——

神 崎 浩

Hemingway の短篇小説には Nick Adams を登場させた作品が12ある。さらに、Nick は登場しないが明らかに Nick と思われる人物が描かれているものが、4 篇ある。それを整理すると次のようになる。

In Our Time (1925)

“Indian Camp”

“The Doctor and the Doctor’s Wife”

“The End of Something”

“The Three-Day Blow”

“The Battler”

“A Very Short Story” *

“Cross-Country Snow”

“Big Two-Hearted River”

Men Without Women (1927)

“In Another Country” *

“The Killers”

“Ten Indians”

“Now I Lay Me”

Winner Take Nothing (1933)

“The Light of the World” *

“A Way You’ll Never Be”

“A Day’s Wait” *

“Fathers and Sons”

(*のついた作品は Nick Adams の物語に準ずるものである)

Nick Adams に視点を据えて、Hemingway の短篇を読むことを最初に主張したのは Philip Young であった。その Nick Adams は1925年に出版された *In Our Time* で初登場し、1933年の短篇集 *Winner Take Nothing* を最後として、以後 Hemingway はこの主人公を二度と彼の作品には使わなくなってしまう。

Winner Take Nothing の最後の作品として収められている “Fathers and Sons” は、Nick Adams ものの総決算的な短篇だと言えるだろう。これは、ただ単に作品の年代順における位置だけの問題ではない。*In Our Time* の冒頭の作品、従って、Nick Adams Story と呼ばれる一連の作品の第一作目と考えられる “Indian Camp” は、Nick が往診に出かける父親の医者連れられてインディアンの部落へ行く話であり、これは「父親と息子」の関係をテーマとした物語であることは明白である。

医者父親が、息子に実地教育をするつもりで、難産に苦しむ患者の診療に立ち合わせる。ところが、思いがけなく帝王切開の手術と、インディアンの夫の自殺の場面を目撃することとなる。父親の意図した息子の教育という点では大成功であった。

この短篇は多くの研究者たちが指摘したように Nick Adams の生と死に対する initiation の物語であることは間違いない。それと同時に、これは Hemingway が常に持っていた「父親と息子」をテーマとした作品なのである。短篇作者としての Hemingway は、父親を描くところから出発して、彼の分身とも言うべき Nick が父親となる物語を描くことで一つのサイクルを終らせているのである。

このように “Indian Camp” を「父親と息子」の関係という観点で見れば、“Fathers and Sons” がその締めくくりの作品と考えるのは当然のことと言えるのである。

“Indian Camp”においては「息子」であった少年 Nick は，“Fathers and Sons”では38歳の「父親」となっている。かつて父親が Nick を伴ってボートで湖面を渡ったように，Nick は今や彼の運転する車に息子を乗せている。そして，“Indian Camp”の終幕が「父親と息子」の会話で終るように，ここでもその結末は父親と息子の会話となっている。しかしここで注目すべきことは，“Fathers and Sons”では，そのタイトルで示されるように，父親も息子も複数形であり，Nick と息子の背後には，かつての Nick の父親と息子の Nick の姿が重なり合っていることである。つまり，ここでの「父親と息子」の関係は二組の親子が，ある時は表面に，ある時は背後に回って複雑に交錯し合うのである。38歳の Nick 自身の父親としての意識が，自分の父親の思い出を呼び起し，息子だった頃の自分の姿と，現在の息子の姿とが重なり合うのである。だから“Fathers and Sons”は，“Indian Camp”を下敷とした作品であり，少なくとも，この二つの作品は，合わせて読むことによって，その理解の度を深めることのできると言えるだろう。

Nick が車を走らせているのは，摘み終った綿畠やとうもろこしの切り株のある畠であるので，父親と過した北ミシガンではなく，アメリカの南部の或る地方だろう。車の数も少ない日曜の夕暮れ近く，目的地も間近で，息子は隣りのシートで眠っている。Nick の視点は窓の外へ向けられ，作物や茂みの様子を観察する。そして知らず知らずのうちに，“.....hunting the country in his mind as he went by ; sizing up each clearing as to feed and cover and figuring where you would find a covey and which way they would fly.” (p. 460) と想像上の狩猟が次の“Hunting this country for quail as his father taught him, Nicholas Adams started thinking about his father.” (p. 461) という父親の思い出へと彼を導く。

父親の思い出となれば，まず最初に思うことは，何よりも彼の眼であり，

人間離れのした鋭く澄明な視力である。“His father saw as a big-horn ram or as an eagle sees, literally.” (p. 461) その直後に呼び起される思い出は北ミシガンの情景である。He would be standing with his father on one shore of the lake, his own eyes were very good then and his father would say, ‘They’ve run up the flag.’ Nick could not see the flag or the flag pole. ‘There,’ his father would say, ‘it’s your sister Dorothy. She’s got the flag up and she’s walking out on to the dock.’” (p. 461)

ここで重要なのは、Nick が父親と並んでその岸辺に立っていた湖が、かつては彼等が早朝にインディアン部落へ漕ぎ渡って行ったのと同じ湖であり、自分の視力を息子に無邪気に自慢して見せる父親の姿が、出産の様子を幼ない息子に見せて実地教育をしようと考えた医者の子の父親の無邪気さと、そのまま重なり合うということである。

Nick の彼の父親に対する回想は、“Also, he had much bad luck, and it was not all of it his own. He had died in a trap that had helped only a little to set, and they had all betrayed him in their various ways before he died.” (p. 461) と進展し、周囲の人々に裏切られ、わなにかかって死んだ父親を気の毒に思っている。

だが、Nick の父親のひっかかったという「わな」とは一体何んだらう。“He had died in a trap.....” といった描き方は、あまりにも漠然としすぎている。そして、Nick Adams の現われる一連の物語に関する限り、父親の死については、これ迄何も書かれたことがなかった。ところが、ここではあまりにも突然、次のような回想が現われる。“Now, knowing how it had all been, even remembering the earliest times before things had gone badly was not good remembering.” (p. 463) 思い切って書いてしまったら、かえってそのような思いを払いのけて忘れることもできるのだけれど、それにはまだ時期が早すぎる。“There were

still too many people alive for him to write it.” (p. 463) それならこれでこの問題は終りかと言うと、父親の死顔についての意味ありげな思い出が書かれてから、また “.....but there were still too many people alive for him to write it.” (p. 463) という言葉が十数行先の所で出て来る。

Hemingway の父親は、“Father sand Sons” を書く 4 年前に銃による自殺をとげている。そのことを思い合わせると、この短篇の中での Nick の父親の死もまた、追いつめられて拳銃の自殺ではなかったかと想像することは当然と言えるだろう。

父親を感傷的で裏切られやすい男として断定する一方で、わなにかかっていたからなのだと、自分に納得させようとする Nick の姿は、まさに作者 Hemingway が、父親の自殺について、その行為を肯定するか否定するか、そのどちらともきめかねている姿である。

ここで、もう一度 “Indian Camp” に視点を向けると、この Nick Adams の発端の物語は、人間誕生の物語として進展するうちに、突然その前に思いがけない死が立ちはだかる。そして、その締めくくりの物語である “Fathers and Sons” においても、日曜日の平和に満ちた父親と息子のドライブの物語の中に、またも死の回想が現われる。

自殺という形で訪れた死によって始まった Nick Adams の物語は、その長期にわたった一連の物語の終結も自殺の回想によって行われようとしている。だが、あまりにも死の影につきまとわれた Nick は、その思いから離れるために、父親とは無関係の思い出に耽るのである。

それは北ミシガンの森の中でのインディアンの少女による性の体験の思い出であった。死の影を振り払うための生命力に満ちた性の思い出は、彼の父親の一番不得手とするものへの思い出でもあるのだ。

“.....when Nick was a boy and he was very grateful to him for two things: fishing and shooting. His father was as sound

on those two things as he was unsound on sex,.....” (p. 462)

この思い出には少しも暗い陰りもなく、父親の余りにも清教徒的で清潔な性教育を正面から裏切ることが、Nick を父親の束縛から解放することになるのだった。

息子に対する指導者たらんとする父親に対するアイロニーである。だが今や彼自身が父親となっている現在では、Nick 自身この運命の皮肉さとも言うべきアイロニーを逃れるわけには行かない。インディアンの少女 Trudy の回想に耽っている時、目をさました息子からインディアンについて尋ねられる。

“What was it like, Papa, when you were a little boy and used to hunt with the Indians?”

“I don’t know,” Nick was startled. He had not even noticed the boy was awake.

⋮

“But what were they like to be with?”

“It’s hard to say.” Nick Adams said. Could you say she did first what no one has ever done better and mention plump brown legs, flat belly, hard little breasts, well holding arms, quick searching tongue, the flat eyes, the good taste of mouth, then uncomfortably, tightly, sweetly, moistly, lovely, tightly, achingly, fully, finally, unendingly, never-endingly, never-to-endingly, suddenly ended, the great bird flown like an owl in the twilight, only in daylight in the woods and hemlock needles stuck against your belly. (p. 469)

こうして、死の思い出を性の回想によって消し去り、自分の心の平静さを取りもどした Nick は、結局のところ、狩猟の最良の指導者としての父親を回想することで、父親としての自分自身を立て直すのである。

“How old will I be when I get a shotgun and can hunt by myself?” と息子に聞かれて、“Twelve years old if I see you are careful.” と、いかにも父親らしい余裕を持って答える Nick には、狩猟者としての父親の位置と役割の、時代を越えた、つまり、彼の父親から息子への、連続性が暗示されているのである。息子に対する狩猟の指導者としては、Nick は父親の位置と役割を完全に引き次いでいる。この一致と継承の意識の上に立って、Nick はこれまで一度も息子を連れて行った事のない父親の墓へ、今度は一緒に詣りに行く約束をするのである。

Text : *The First 49 Stories* : by Ernest Hemingway. Jonathan Cape. London 1956.

参考書 : ヘミングウェイ : 20世紀英文学案内 佐伯彰一編 研究社 1966